

令和 2 年度
 劇場・音楽堂等機能強化推進事業
 (地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
 成果報告書

団 体 名	公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団	
施 設 名	大分県立総合文化センター	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業	
内定額(総額)	11,419	(千円)
公演事業	11,419	(千円)
人材養成事業	0	(千円)
普及啓発事業	0	(千円)

(1) 令和2年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	県民と創るベートーヴェン交響曲全曲演奏プロジェクト	8/10※、9/16、10/14、10/17、11/8、12/6※、12/12※、12/13※、3/7※	ベートーヴェン「交響曲第1～9番」 県内交響楽団5団体(iichikoグランシアタ・ジュニアオーケストラ他)、九州交響楽団	目標値	入場者 6,000
		iichiko グランシアタ iichiko 音の泉ホール		実績値	入場者 4,127 ※
2	ジュニアオーケストラ演奏会	3月28日	リスト「前奏曲」、伊藤康英「ぐるりよざ」、ドヴォルザーク「交響曲第9番ホ短調」 iichiko グランシアタ・ジュニアオーケストラ	目標値	入場者 1,000
		iichiko グランシアタ		実績値	入場者 712 ※

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(2) 令和2年度実施事業一覧【人材養成事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	
1				目標値	
				実績値	
2				目標値	
				実績値	

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(3) 令和2年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	
1				目標値	
				実績値	
2				目標値	
				実績値	

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

社会的役割(ミッション)と地域特性を踏まえて事業を組み立て、新型コロナの影響は一部あったものの、おおむね予定通りに事業を進めることができた。

<社会的役割と地域特性の把握>

公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団（以下、当財団）の社会的役割（ミッション）は、芸術文化の本質的価値の追求と人材育成や社会包摂を通じた社会的・経済的価値の実現である。当財団では、日本有数のホール機能を誇る大分県立総合文化センター（以下、当センター）を活用し、異文化受容と文化多様性に富んだ歴史的な地域特性を踏まえ、県立美術館、国際交流プラザ、民間施設と一体整備された施設特性を活かしながら、そのミッションに取り組んでいる。また、平成 30 年度に本県で開催した国民文化祭&全国障害者芸術・文化祭を受け、主たる会場となった当センターでは、そのレガシーとして①県民総参加、②人材育成をさらに発展させる事業立案が求められていた。

<事業の適切な組み立てと予定通りの事業推進>

このため、本年度では新たに「西洋音楽発祥の地プロジェクト」をスタートさせ、地域資源の発掘・磨き上げを目指した。公演 1「県民と創るベートーヴェン交響曲全曲演奏プロジェクト」では、生誕 250 年のメモリアルイヤーであり、西洋音楽の中核となる楽聖ベートーヴェンの交響曲全 9 曲を、地元オーケストラ団体の協同により演奏した。新型コロナウイルス感染症の影響により、残念ながら海外オーケストラの招聘は叶わなかったが、九州交響楽団をはじめとする地元の各楽団が素晴らしい演奏を聴かせてくれ、どの公演も来場者の満足度が高く、創造性・芸術性に富んだ質の高い公演を多くの県民が鑑賞することができた。公演 2「ジュニアオーケストラ演奏会」では、隠れキリシタンの文化に着想を得て、彼らによって歌い継がれた音楽をもとに作曲された伊藤康英の交響詩『ぐるりよざ』<管弦楽版>を、ホール付のジュニアオーケストラが演奏することで、中世のキリシタン大名・大友宗麟時代の南蛮文化の音楽について学び、考える機会を創出し、人材育成に貢献した。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

以下の通り、事業の文化的、社会的、経済的意義が継続して認められる。

<文化的意義>

ベートーヴェン交響曲全曲演奏という通年の県内オーケストラ等参加の企画を通じ、実演芸術の魅力（芸術文化の本質的価値）を理解し、感動を覚えるファン層の獲得を図ることができた。また、ジュニアオーケストラの演奏会を通じ、次代を担う人材を育成することができた。

<社会的意義>

県内外 7 つのオーケストラ団体が協力して臨んだプロジェクトは初めての試みであるとともに、各楽団の相互協力にもつながった。「西洋音楽発祥の地プロジェクト」の集大成となる県内の芸術団体が参加する西洋音楽発祥の地を象徴する創作公演に向けた大きな足がかりとなった。芸術文化発信拠点として、当センターがハブとなり諸団体を結びつけ、県内の実演者に発表、表現する場を提供し、実演者同士の交流や実演団体間の活性化が図られた。来場者からも、コロナ禍でストレスが高まる中で、公演を通じて心の安らぎや明日への活力を与えてもらったという感想を多くもらった。

<経済的意義>

新型コロナの影響はあったが、県外からも一定程度の来場者があり（公演 1「県民と創るベートーヴェン交響曲全曲演奏プロジェクト」1.8%、公演 2「ジュニアオーケストラ演奏会」2.8%）、来場者の消費活動（移動や飲食等）による経済波及効果があった。全曲演奏プロジェクトの共通チラシ作成や当センターの友の会会員への告知など、効率的な広報を展開することにより、参画した地元音楽団体にとって、新たな聴衆の獲得につながった。

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

一部事業に新型コロナの影響はあったが、おおむね目標を達成することができた。

公演本体の魅力を伝えるためのレクチャーといった普及啓発や、公演の経験を通じた県内人材養成など、公演・人材養成・普及啓発の3事業を連続したサイクルと捉え、あらゆる層の県民が実演芸術を鑑賞、実演できる場となるよう戦略的な取り組みを目指した。

- ①県民を主体としたプロジェクトを通し、実演芸術の魅力(芸術文化の本質的価値)を理解し、感動を覚えるファン層の育成を図る。
→交響曲第2番や第4番など、このプロジェクトでなければ聴くことができないプログラムが実現できた。どの公演もコロナ禍にもかかわらず、多くの県民にご来場(計4,839人)いただき、大変好評であった(来場者満足度:目標92%⇒実績96.3%)。
- ②創造性、芸術性に富んだ国際的水準を目指した質の高いオーケストラ公演を実現する。
→海外オーケストラの招聘は叶わなかったが、九州交響楽団をはじめとする地元の各楽団がすばらしい演奏を聴かせてくれ、どの演奏会も満足度の高い公演であった。
- ③芸術文化発信拠点として、当センターがハブとなり諸団体を結びつけ、県内の実演者に発表、表現する場を提供し、実演者同士の交流や実演団体間の活性化を図る。
→県内外7つのオーケストラ団体が協力して臨んだプロジェクトは初めての試みであるとともに、各楽団の相互協力にもつながった。
- ④青少年の情操教育の場として、また将来の当センターのファンを育成するため、25歳以下の来場を促進する。
→どの演奏会も25歳以下の割引や学生券を設定し(入場無料は除く)、多くの青少年が来場したが、全演奏会の平均値では目標を下回ったため、今後も若いファン層の育成に努める(25歳以下来場者比率:目標28%⇒実績平均20.5%、ジュニアオーケストラ演奏会35.5%、九州交響楽団31.6%)。
- ⑤鑑賞において手助けとなる公演プログラムに工夫をし、理解促進に努め、継続して通いたくなる劇場づくり。
→各楽団とも充実した曲目解説など、工夫を凝らしたプログラムを準備した。
交響曲全曲演奏のコンセプトが多くの共感を得るとともに、評判も高く、劇場としての価値を高めた。
- ⑥グローバル人材を育成する上で、クラシック音楽などの世界に通用する文化的教養を高めることは必須であり、世界共通言語としての芸術文化を語ることでできる人材育成を図る。
→公演鑑賞だけでなく、専門家(指揮者)を招いてベートーヴェン交響曲に関する事前レクチャーを3回実施し、参加者から大変好評をいただいた。
- ⑦無料の託児サービスを提供することで、子育て世代が芸術鑑賞する機会を提供する。
→託児サービスを準備(目標5人以上)していたが、新型コロナの影響などから、利用者はいなかった。
一方で親子鑑賞室(ホールに設けた別室で、家族が公演を鑑賞)による鑑賞が多かった。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
 アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

アウトプットに対して、事業期間、事業費はともに適切で、新型コロナの影響による企画の変更は一部あったものの、おおむね当初の計画通りに進んだと評価できる。

公演 1「県民と創るベートーヴェン交響曲全曲演奏プロジェクト」において、新型コロナウイルスの影響で、一部の公演について実施日程が変更されたほか、当初予定のうち 3 公演が中止となってしまったが、代替公演や代替企画を実施することにより、交響曲第 1 番から第 9 番まで、年度内に計画どおり全ての公演を実施することができた。

なお、海外オーケストラの招聘を予定していたが、来日がかなわず、地元芸術団体の公演を代替としたため、全体事業費としては大幅な減額となった。

全ての公演において、万全の感染症対策を講じて臨み、客席は前後左右を 1 席ずつ空け、1/2 の座席数で実施し、来場者から安心して鑑賞できたとの声をもらった。当該対策を踏まえて設定した座席キャパシティに対する入場者率は、公演 1「県民と創るベートーヴェン交響曲全曲演奏プロジェクト」で 74.6%、公演 2「ジュニアオーケストラ演奏会」で 90.2%というように、高い実績を達成した。

令和 2 年度公演事業の実施概要

実施日程		公演	演奏会	曲目	入場者率
実績	予定				
8/10	2021/3/29	1	ジュニアオーケストラ 第 11 回定期演奏会	第 1 番他	80%
9/16	同左	1	〈関連企画〉ベートーヴェンレクチャー第 1 回	第 1～4 番:レクチャー	45%
10/14	同左	1	〈関連企画〉ベートーヴェンレクチャー第 2 回	第 5～8 番:レクチャー	55%
10/17	同左	1	大分県立芸術緑丘高等学校 第 16 回定期演奏会	第 8 番他	100%
10/17	同左	1	大分チェンバーオーケストラ 第 15 回記念演奏会	第 5 番他	84%
11/8	同左	1	大分交響楽団 第 43 回定期演奏会	第 3 番他	57%
12/6	6/21	1	別府市民フィルハーモニア管弦楽団 第 27 回定期演奏会	第 4 番他	95%
12/12	同左	1	〈関連企画〉第九レクチャー	第 9 番:レクチャー	53%
12/12	12/13	1	大分ベートーヴェン・プロジェクト特別上映会 (ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団)	第 9 番(代替企画:ライブ公演から上映会に変更)	53%
12/13	11/28	1	九州交響楽団 大分公演	第 2,6 番(代替公演:室内楽おおいた〜grand〜から変更)	65%
3/7	12/7	1	九州交響楽団 大分特別追加公演	第 7 番他(代替公演:カンマーフィルから変更)	83%
3/28	同左	2	ジュニアオーケストラ 第 12 回定期演奏会	交響詩「ぐるりよざ」他	90%

(注)公演: 1「県民と創るベートーヴェン交響曲全曲演奏プロジェクト」 2「ジュニアオーケストラ演奏会」

曲目: 第○番はベートーヴェン交響曲の番号

入場者率: 設定座席数に対する入場者率

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

当財団の有する広域的な人材・団体ネットワークと、当センターが有するわが国有数のホール機能という、ソフト、ハード両面のリソース(資源)を最大限に活用し、ベートーヴェン交響曲全曲演奏プロジェクトに代表される芸術性・独創性の高い企画を実現して大勢の県民に参加・鑑賞をいただいた。

【視点1】劇場・音楽堂等が地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮するための資源

(1) 劇場・音楽堂等を象徴する人物、鍵となる人物の存在

- ・川瀬麻由美氏：ジュニアオーケストラ芸術監督。桐朋学園大学卒で、梓室内管弦楽団のコンサートマスターなどの経歴を持ち、現在は大分県立芸術文化短期大学教授で音楽科長。
- ・森口真司氏：ベートーヴェン交響曲全曲演奏プロジェクトにて複数のオーケストラを指揮しただけでなく、レクチャー講師としてベートーヴェンの魅力を解説。これまでオペラ指揮者として多くのオペラ作品を指揮。現在は大分県立芸術文化短期大学教授。

(2) 専属団体、フランチャイズ団体、提携団体

〔専属団体〕

- ・iichiko グランシアタ・ジュニアオーケストラ：小学校3年生から22歳までを対象とするホール付属のジュニアオーケストラとして平成21年度より活動開始。26年度より芸短大との連携を強化し、芸短大との合同演奏会や、県内公立文化施設への団員派遣など、県全体の芸術文化振興を牽引している。

〔提携団体〕

- ・大分県立芸術文化短期大学：平成21年3月に友好交流協定を締結。相互の事業に対し、講師の派遣など、全面的な協力関係にある。
- ・大分県芸術文化振興会議：県内の芸術文化団体の活動支援や連携を目的とした団体。152の芸術文化団体が加盟しており、情報共有や県民参加型などの連携事業を展開している。
- ・九州交響楽団：地元・九州を拠点にするプロオーケストラ。今年度は2公演開催した。これまでも制作オペラの演奏を担当するなど、協力関係を継続している。
- ・大分県立芸術緑丘高等学校、大分交響楽団、別府市民フィルハーモニー管弦楽団、大分チェンバーオーケストラ

(3) 創造活動に関わる建物設備等

三面舞台やオーケストラピットなど、優れた舞台機構を備える大ホール「グランシアタ」(1960席)と、音響に定評がある中ホール「音の泉ホール」(710席)という日本有数のホール機能を有する。さらに同一施設内にホテルが併設されていたり、充実した地下の練習室エリアが備わっているなど、アーティストが滞在して創造活動を行う環境も整っている。また、九州圏内で本格的なバレエやオペラが上演できる会館が少ないため、定期的にバレエやオペラの上演に取り組んでいきたい。

【視点2】地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する事業として優れた点

(1) 公演の企画内容、作品の芸術性、独創性、新規性、先導性

ベートーヴェン生誕250年にちなんだ交響曲全曲演奏は、当センター独自の企画であり、我が国における「西洋音楽発祥の地」という大分の歴史性を踏まえたコンセプトが多くの共感を得るとともに、評判も高く、劇場としての価値を高めた。このような企画が地方のホールで実現できたことを誇りに思う。また、交響曲全曲演奏の各演奏会においてスタンプラリーを実施した。全ての公演に来場した来場者からは、大分でこのような企画が実現できたことは、とても贅沢で大変満足した、との声をもらった。

ジュニアオーケストラでは、本県出身の龍笛奏者を招き交響詩「ぐるりよざ」[管弦楽版]という大変珍しい楽曲に挑戦した。作曲家自身にも来県いただき、直接指導を受けるという貴重な機会も実現した。

公演鑑賞だけでなく、専門家(指揮者)を招いてベートーヴェン交響曲に関する事前レクチャーを3回実施し、どの講座も参加者からは大変好評をいただいた。このような教養講座を求める声が多く、今後の企画においても拡充させていくことで、本公演に対する興味の喚起につなげたい。

(2)文化芸術情報の整理、蓄積、提供、発信

自主制作の公演については、毎回記録映像を撮影し、情報を蓄積している。このほか財団広報誌において、当センター開館 20 周年やジュニアオーケストラ設立 10 周年などのあゆみを節目節目で整理し、発信している。

当センターと隣接する県立美術館を合わせた一帯を「芸術文化ゾーン」と称し、本県の芸術文化の中心拠点として位置付け、芸術文化団体をはじめ、教育、産業、福祉、医療など様々な分野の団体等とのネットワークを構築し、県内芸術文化活動の情報発信と賑わいあふれる空間づくりを目指している。

芸術文化ゾーンは、本県中部に位置する県庁所在地大分市の中心市街地にあり、JR や高速道路で県内各地域と結ばれているなど、交通の便に優れている。各地の県民に当センターを訪れてもらうにしても、逆に各地にアウトリーチを行うにしても、最も効率的・効果的な立地条件にある。

大分県芸術文化友の会「びび」は、当センターと県立美術館共通の会員組織である。会員向け（広報誌の制作や、公演・展覧会情報の郵送・メール）やマスメディア向け（プレスリリース）も、美術館と一緒に情報発信することで、実演芸術ファンにとどまらない広範な層へ波及を狙っている。

また、大分県公立文化施設協議会等の県内ネットワークの枠組みを活用し、「大分ホールナビ」と称する共同広報や研修事業、共催事業、調査研究等を市町村の文化施設等と連携して実施し、相乗効果を発揮している。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

大分県が長期総合計画に掲げる政策「創造県おおいた」(創造性と多様性に満ち、文化・社会・経済の活力にあふれた大分県)を、新型コロナの影響下にあっても、県と協力して、その実現に向けた取り組みを進めることができた。お客様の期待・ニーズは、来場者アンケートなどで把握し、今後の企画に反映させることで、地域の文化芸術の発展につなげている。

<ステークホルダーの期待>

当財団は、施設設置者である大分県の政策「創造県おおいた」の実現を図るべく、隣接する県立美術館とともに、県民の幅広い欲求に応えられる多様な文化事業を実施することで、潤いのある県民生活の創造と健やかで個性ある地域づくりに寄与することを目的としている。

当センターが主催する事業については、県民参加型で質の高い公演として、評価を受けている。県はまた、ホール利用率 87%という目標を設定しており、その達成に向けて、幅広い層に当センターを知ってもらい、新たに利用してもらえるよう営業活動にも努めている。

令和 2 年度は新型コロナによる貸館需要減少で、ホール全体の利用率は 42.7%に止まるなか、自主事業（本件公演）については、感染症対策を徹底して計画的に実施することで、コロナの影響下においてもステークホルダーの期待に応えた。

<地域のニーズ>

最終的なステークホルダーであるお客様・県民からの期待・ニーズについては、主催事業の来場者にアンケートを実施するなどして、利用者意見・要望の聴取及び分析に努めている。特に今年度は感染症対策のため、全てのアンケートにクリップペンを添付して配布したことにより、例年 2 割弱であった回収率が飛躍的に向上（公演 1: 46.1%、公演 2: 39.5%）した。

県内には、音楽・美術を専門に教育する県立芸術文化短期大学、県立芸術緑丘高校、私立大分中学・高校の他、複数のアマチュアオーケストラ団体が存在するなど、実演者の人口が多い。しかしながら、彼らが一堂に会する機会は少なかった。このため、今回のプロジェクトは、彼らの相互交流を促進するきっかけとなった。本県のオーケストラにとって大きな経験となっただけでなく、県民の当劇場施設の活用の幅、文化活動の幅の広さを示すことができた。参画した主要な 4 つの県民オーケストラの出演者からも、力を合わせてベートーヴェン交響曲全曲演奏という企画に取り組むことができ充足感が得られた（大分チェンバー）、コロナ禍で全国的に音楽公演が中止を余儀なくされている中、開催できてよかった（大分響）、演奏者はもとより楽団にとっても大変意義あることで、大きな収穫となった（別府市民フィル）、演奏の質も例年以上の評価をいただき、生徒たちも満足の表情を浮かべていた（県立緑丘高）など、出演者にとっても満足度の高いものであった。本公演を鑑賞した県民は、芸術文化への関心を深め、豊かな心と感性を育むことができ、豊かな芸術文化地方都市の発展の大きなきっかけとなった。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

当センター、県立美術館などを擁する当財団は、組織全体の中期経営戦略計画(2019～2022)に基づき、PDCA サイクルを着実に回すことで、組織活動の持続的な発展を図っている。

<経営全般>

当財団は、当センター、県立美術館、財団本部(経営管理、広報連携、ファンドレイジング・事業評価支援、障がい者芸術文化支援等)などから構成され、組織全体の中期経営戦略計画(2019～2022 年度)を平成 31 年 3 月に策定・公表している。当該計画をもとに、当センターのミッション、ビジョン、地域の特性・ニーズ、施設の強み・特色を明らかにし、事後の評価結果を財団全体でフィードバックし、その結果を令和 2 年度の劇場・音楽堂等機能強化推進事業に反映させている。このように、中期計画(P)をベースに、実施(D)・評価(C)・改善(A)のサイクルを着実に回していきたい。一方、近時のコロナ禍を踏まえるに、感染の拡大・収束の動向を切れ目なくウォッチし、計画の臨機応変な見直し・改善を図ることも等しく重要といえる。計画性と柔軟性の適切なバランスを取ることが、財団の活動の持続的な発展を図るうえで不可欠である。

<人材面> (令和 2 年度 企画/広報担当課 14 名、ただし財団全体職員 66 名)

自主事業については当センターの担当課(企画普及課)全員でチームとして対応し、情報を共有するとともに、事業ごとに主担当と副担当を割り当て、知識・経験の継承に努めている。近年はセンター・県立美術館・国際交流プラザ間での相互異動や、大規模な芸術文化ゾーンイベントでは財団総出で対応するなど、横断的な取り組みも活発化しており、美術館との連携会議も定期的に開催している。また「働き方改革」に対応した労働環境の整備のため、チケット販売方法やジュニアオーケストラ事務局の体制の改革にも取りかかっている。

その他に、開館以来 21 年間継続するホール・レセプションのボランティア「emo スタッフ」(登録者数 48 人)がいる。出演者が舞台上で最高のパフォーマンスを行い、その非日常の空間を来場者が楽しむうえで、彼らは欠かせない存在となっている。

<財務面> (令和 2 年度 当センター自主事業決算見込額 85 百万円、ただし財団全体決算見込額 1,050 百万円)

財団の主な収入源は、県からの指定管理料と施設使用収益だが、その他にも民間からのファンドレイジングの多角化を試みている。財団全体としては、当センター、美術館共通の会員組織である大分県芸術文化友の会「びび」の会費収入がある。また、当センターに関しては、地場企業である三和酒類(iichiko)のネーミングライツ(命名権)も重要な収入源となっている。

さらに今年度事業においては、公演 2「ジュニアオーケストラ演奏会」で、2 社より企業協賛金を獲得しており(令和 3 年度は 3 社)、これからも引き続き、大規模な公演事業で広く協賛金を獲得するとともに、友の会法人会員の拡充を目指していきたい。

<各方面とのネットワーク>

大規模な制作舞台公演やイベントを企画することで多くの団体との連携が強化された。特に、オーケストラにおける他団体間交流の深まりは、県民参加による創作舞台「西洋音楽発祥の地プロジェクト」創作舞台の展開へとつながっていく。

<施設面>

防災訓練の実施に加え、防災研修も実施している。また、職員のみを対象としていた防災訓練に、ボランティアスタッフ等にも参加してもらうことで、より実態に則した訓練を実施している。